

油州始末記

一
五
年
月
日

咸
同
精
太
著

德州妨末記瓦解成田精太著



北 隆 館

昭和二十五年一月二十五日初版印刷
昭和二十五年一月三十日初版發行

定價 二五〇圓

解 瓦

著 者 成 田 精 太

發行者 東京都中央區横町三ノ三
福 田 良 太 郎

印刷所 東京都中央區京橋片倉ビル
中央印刷株式會社

發行所 株式會社 北 隆 館
東京都中央區横町三ノ三

電話京橋(56)七二四六番
振替番號東京七五〇番

中 島 製 本

まえがき

今度の戦争で日本人中いちばん犠牲を強いられたのは、地域的にいうと、在満同胞である。満州の支配者はわずかの方に満州国、ソ連軍、国府、中共と轉々した。この混乱の中に、満州の日本人たちは死と闘う苦難の道を通った。そして、風呂敷包み一つをもって、第二の故郷を後に、日本にたどりついた。どの人にもはげしい苦勞があった。しかし、敗戦後の満州で何が行われたかという質問を發するならば、どの人も自分の狭い周囲しか知らない。新聞や通信のない苦界ではむりもなかった。本書はこの質問に答えるために、広く満州の当時の実情を述べたものである。

戦争の苦痛はなみ大抵のものではない。暴力の犠牲にたる娘をながめる父、子を棄てる母——これらの友人たちの苦しみがいかに堪えがたいものであるかを、日本の同胞は知らない。日本国土で外敵と戦ったことのない日本人はこの苦しさを味う歴史を知らなかった。在満同胞は全日本人を代表して、身をもってこの苦難をうけてきたのである。

しかし満州の敗戦史は、日本民族にとり悲しい記録の羅列ばかりではない。百数十万の同胞が政府から一銭の補助をうけずに整然と満州から退いた蔭には、日本の民族の優れた面がまた發揮された。日本民族は他の民族の知らない傳統的な強い團結性をもっていることを、敗戦の満州で如実に示してみせた。また世界に類例のないこの「民族移動」を指導したのは、軍人でも官吏でもなく、いわゆる民間人の挺身努力によるこのことは、日本の民衆はいかなる混乱の後にも、りっぱに自らを治める能力のあることを示したものである。

本書は私の体験ばかりでなく、当時の満州事情を明らかにする眞実の記録を集めたもので、日本敗戦の一つの外史をなすものである。本書が世に出ることによって、当時の満州の敗戦事情が新たに回想され、百数十万同胞の苦闘の姿が再認識され、さらにつづいて、一般引揚同胞にたいする薄らぐ社会の関心が強まるならば、まことに著者の喜びとするところである。

一九四九年十二月

成 田 精 太

敗 戦 目 次

宣戦布告の爆弾	二
關東軍司令部の通化移轉	八
新京を無防備都市に	一四
滿州皇帝の都落ち	一九
避難列車	二四
滿鐵本部の流轉	三〇
關東軍の最後	三五
滿州國解消す	四〇

悲しい外交

ソ連はなぜ日本に開戦したか	四九
---------------	----

日本はいかにソ連にたいしていたか…………… 六

首都長春は赤軍の手に

赤軍の長春入城…………… 六

語られた關東軍の秘密…………… 七五

空しく歸る貴賓軍…………… 八一

混乱の滿州

捕虜はソ連へ…………… 八九

日本民族の小移動…………… 九六

生活の絶望…………… 一〇一

ソ連の英雄

英雄ボンダレンコ…………… 一二三

大將より偉い少將……………一二

社會主義的増産方法……………一三

ソ連側滿鐵を接收す

中長鐵路のソ連代表……………一九

ソ連側の鐵道対策……………二四

戰犯狩り

滿州國政府首腦部の逮捕……………二五

革命記念日の留置場……………二九

捕えられた關東軍參謀……………二〇

集る滿州の「顔役」……………二五

敗戦者の生活

生きる者と死ぬ者……………一六七

中國人になつた人々……………一九七

續 戦犯狩り

新聞記者の責任追及……………二〇五

戦争責任の範圍……………二二二

シベリヤへゆく人……………三三〇

敗戦後の滿州經濟

中長鐵路と日本人……………三三一

ソ連の對滿經濟活動……………三三七

ソ連人の印象

階級觀念の強調……………三四七

長官中心主義の仕事……………	三五
日本人にたいする態度……………	三六

國共衝突とソ連の態度

國共衝突とソ連の立場……………	三六
國府側の滿州進出とソ軍の撤退……………	三六
ソ連撤退後の國共關係……………	三九

中共軍の旗の下に

林彪と中共軍……………	三七
中長鐵路理事會の中共代表……………	三八
中共軍長春を放棄す……………	三九
中共軍に参加する日本軍人……………	三九

國府軍の長春支配

朝鮮人の虐殺……………三二

迫害されたロシア人……………三五

日本への引揚準備……………三四

滿州よ、さようなら！

在滿邦人の生活記錄と引揚者數……………三二

最後の滿州……………三四

附錄 滿州の日本人概況表……………三四

敗

戰

宣戰布告の爆彈

一九四五年（昭和二十年）八月九日の午前一時は、すでにとつくに廻つていた。

滿州国の首都新京は、眞夜中の靜かな眠りに落ちていた。晝の間やきつける太陽にうなだれていた公園の草や木は、寢汗をかいて濡れていた。人声もない。風もない。動かぬまつ黒な夜の空氣が、關東軍司令部のいかめしい大瓦の家根を、滿州皇帝の若い愛妃の眠る宮城を、幾千幾万の小さな家、大きな家を、残るくまなく包んでいた。この夜は月は出番でなかった。だが、黒い空の大天井には、数かぎりもない寶石がつり下げられて、キラキラと美しい光をきそつていた。物音一つない靜けさ。鼠や南京虫でさえも、この靜けさを破るまいと、足音をひそめて歩いていく。

柱時計が午前二時の時報をつける少し前のことである。とつぜんカン高いサイレンが、町の一角から喚きたつた。母を見失つた幼兒の泣き声のように、サイレンは長く尾を引く響きをたて、屋根から屋根へと夜の空氣をふるわせる。私はベットの中ではと目をさました。

間もなくホテル全体がざわめきだし、部屋部屋のドアが開け放され、廊下を走る足音が高まってきた。

「空爆だッ！ 避難開始、避なーン！」

蟻の巣をつついたように、人々は部屋から廊下へ、廊下から外へと流れてゆく。男の声にまじって、理性を部屋におき忘れた女のオロオロ声がきこえてくる。

「どこ、どこへ行くのよ、どこーへ？」

「兒玉公園だ。兒玉こーえん。」

太い声が遠くではり上げられている。

満州国が潰滅してから、新京はまた元の名の長春に帰ったが、この町を訪れたことのある人の何ひとつにも、兒玉公園の位置はすぐ頭に浮んでくるにちがいない。新京の駅をおりると、すぐ駅前の左にはヤマト・ホテルの白い建物。これは日露戦争以前にロシアが建築した建物を改造したホテルである。右側にはコンクリート造りの新しい四階建の大建築。これが満鉄本部である。この二つの建物の間に挟まれた停車場前の中央通りは、どこまでも真っすぐに

続いていて、五―六丁ゆくと広い谷間にでる。道は谷間を越えてさらに南へ、南へと進むが、この谷の右側にある公園が、日露戦争当時の將軍——兒玉源太郎大將の名をとって兒玉公園と名づけられていた。谷をこえて向うの右の丘には、日本の古いお城の形ちをとつた大瓦ぶきの堂々たる建物があたりをへいげいしている。これこそいわずと知れた満州の支配者——関東軍司令部に外ならなかった。

しばらくすると、ホテルの二階の階段をわれ勝ちにやかましく踏みならして下りる足音が、まばらになった。私の部屋の下では、公園へ、公園へと急ぐ人波が、コンクリートの舗道をけり立てている。子供をよぶ声、泣きさけぶ声、息をきらしている荒い呼吸。難船で大海になげだされた人々が、一つの浮島に突進するように、命をかけて公園へと走る足音が、町一面に流れている。

こんどの第二次世界大戦で、多くの人たちはいくたびか空爆の危険に身をさらされた。しかし、最初の爆撃に面した時くらい、神経の緊張を感じた時はなかったであろう。人々の目の前には、自分の意志と体力によってどうにもならない絶望の恐怖が立ちふさがっている。

拳をにぎりしめても、無力抵抗であった。そればかりではない。最初の空爆は、経験のない人たちの恐怖心を、幾層倍にも幾層倍にもあおりたてる。それは初めて戦場に引きだされた新兵の緊張に似ている。

当時日本の町々は連日はげしい空爆の犠牲になっていた。だのに新京の町の人たちは空爆の音どころか、敵機の影すらも見てはいなかった。それがついにいま、最初の空爆の危険が刻々と新京の町に迫っていた。そして未経験の空爆にたいする恐怖は、町の人々の心の中に氷のように冷く凝結した。飛行機のモーターの音が遠くに聞えてくる。人々は息を殺す。町は、一瞬、死骸のように静かになった。

私は部屋の窓をひらいた。町を走る足音もはやない。町じゅう電燈を消した月のないまっくらな夜に、星が火の子を散らしたように美しく光っていた。数台の飛行機のモーターの響きは、しだいに高まつてくる。ついに頭上にきた。爆弾の破裂する音が二、三度遠くで聞こえた。そして飛行機は遠ざかって行った。

これが新京最初の空爆であった。しかしこれこそ、ソヴェト連邦が満州国にたいし、長い